宇治拾遺物語巻一から三話

第十一話　源大納言雅俊、一生不犯の金打せたる事

これも今は昔、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。仏事をせられけるに、仏前にて、僧に鐘を打たせて、一生不犯なる（一生女と交わらない僧）を選びて、講を行なはれけるに、ある僧の礼盤（高壇）に上りて、少し顔・気色たがひたるやうになりて、鐘木（しゅもく）を取りて、振り回して、打ちもやらで、しばしばかりありければ、大納言、「いかに」と思はれけるほどに、やや久しく、ものも言はでありければ、人ども、おぼつかなく思ひけるほどに、この僧、わななきたる声にて、「かはつるみ（オナニー）はいかが候ふべき」と言ひたるに、諸人、おとがひを放ちて笑ひたるに、一人の侍ありて、「かはつるみは、いくつばかりにてさぶらひしぞ」と問ひたるに、この僧、首をひねりて、「きと夜（すこし昨夜）べもしてさぶらひき」と言ふに、おほかた、どよみあへり。そのまぎれに、早う逃げにけりとぞ。

第十四話　小藤太、聟におどされたる事

これも今は昔、源大納言定房といひける人のもとに、小藤太といふ侍ありけり。やがて、女房にあひ具してぞありける。娘も女房にて使はれけり。この小藤太は、殿の沙汰をしければ、三通り四通りに居広げてぞありける。この娘の女房に、生良家子（なまりやうけし）（良家の）の通ひけるありけり。宵に忍びて、局へ入りにけり。暁より雨降りて、え帰らで、局に忍びて臥したりけり。この娘の女房は、上へ（女房として）（の仕事で）のぼりにけり。この聟の君、屏風を立て回して寝たりける。※

春雨、いつとなく降りて、帰るべきやうもなくて、臥したりけるに、この舅の小藤太、「この聟の君、つれづれにておはすらん」とて、肴（さかな）、折敷（をしき）にするゑて持ちて、いま片手に、提（ひさげ）に酒を入れて「縁より入らん」は、人、見つべし」と思ひて、奥の方より、さりげなくて持て行くに、この聟の君は、衣を引きかづきて、のけざまに臥したりけり。「この女房の、とくおりよかし」と、つれづれに思ひて臥したりけるほどに、奥の方より、遣戸を開けければ、疑ひなく「この女房の上よりおるるぞ」と思ひて、衣をば顔にかづきながら、あの物をかき出だして、腹をそらして、けしけしと起（勃起）こしければ、小藤太、おびえて、なけ（のけぞり）されかへりけるほどに、肴も打散らし、酒もさながらうちこぼして、大ひさげをささげて、のけざまに伏して倒れたり。頭を荒う打ちて、まくれ入りて臥せりけりとか。

※ 平安時代には通い婚も同居婚もあった。通い婚は「忍びて」とあるものの通常は娘の父母や女房達または一部の了解

や手助けがあった。女房は十二単衣を着ている。つまり制服ＯＬの仕事上がりを待つ下半身男。朝には帰る通い婚、朝でもヤルか。この十一話と十四話の間に有名な稚児の空寝、桜を見て泣く話がある。

第六　中納言師時法師の玉茎（玉と茎）検知の事

これも今は昔、中納言師時といふ人おはしけり。その御もとに、ことの外に色黒き墨染の衣の短きに、不動袈裟といふ袈裟かけて、木練子の念珠の大きなる繰りさげたる聖法師入り来て立てり。中納言、「あれ（あなた）は何する僧ぞ」と尋ねらるるに、ことの外に声をあはれげになして、※「仮の世はかなく候ふを忍びがたくして、無始よりこのかた生死に流転するは、詮ずる所、煩悩にひかへられて、今にかくて憂き世をを出でやらぬにこそ。これを無益なりと思ひ取りて、煩悩を切り捨てて、ひとへにこのたび生死の境を出でなんと思ひ取りたる聖人に候ふ」と言ふ。中納言、「さて煩悩を切り捨つとはいかに」と問ひ給へば、「くは、これを御覧ぜよ」と言ひて、衣の前をかき上げて見すれば、まことにまめやかのはなくて、ひげ（毛）ばかりあり。こは不思議の事かなと見給ふほどに、下にさがりたる袋のことの外におぼえて（金玉が異常）、「人やある」と呼び給へば、侍二三人出で来たり。中納言、「その法師引き張れ」と宣へば、聖、まのしをして（すまして）、阿弥陀仏申して、「とくとくいかにしも給へ」と言ひて、あはれげなる顔気色をして、足をうち広げておろねぶりたるを（少し目を閉じ）、中納言、「足を引き広げよ」と宣へば、二三人寄り引き広げつ。さて小侍の十二三ばかりなるがあるを、召し出でて、「あの法師の股の上を手を広げて上げ下ろしさすれ」と宣へば、そのままにふくらかなる手して上げおろしさする。とばかりあるほどに、この聖、まのしをして、「今はさておはせ（もうそのくらいで）」と言ひけるを、中納言、「よげになりにたり。たださすれ。それそれ」とありければ、聖、「さま悪しく候ふ。いまはさて」と言ふを、あやにくにさすり伏せけるほどに、毛の中より松茸（隠語）の大きやかなる物のふらふらと出で来て、腹にすはすはと打ちつけたり。中納言を始めて、そこら集ひたる者ども、諸声に笑ふ。聖も手を打ちて臥し転び笑ひけり。はやう、まめやかものを、下の袋へひねり入れて、続飯（のり）にて毛を取りつけ（はりつけ）てさりげなくして、人を謀りて物を乞はんとしたりけるなり。狂惑の法師にてありける。

※仰々しいいで立ちや芝居がかった言葉にすでに笑いの伏線が張られている。それにしても十二三の小侍は災難だな。